

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520117

研究課題名(和文)空間調整術としてのアート：ネオ・プレモダニズムの系譜学

研究課題名(英文)Art as a tuning of the body/mind/space: a genealogy of neo-pre-modernism

研究代表者

外山 紀久子(Toyama, Kikuko)

埼玉大学・人文社会科学研究科(系)・教授

研究者番号：80253128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代以降、個々の芸術ジャンルの境界が動揺しモダニズムの媒体特定性が失効する過程の中で、自己の心身とその環境・周囲世界へ同時に働きかける「自己変革」のアートが突出してくる。その具体的な事例の調査・研究とともに、共通する思想的文脈として観察される古代(前近代)ないし非西洋の生命論的宇宙観/自然観について考察した。

なかでも、(1)自己変革の作用が明示的に認められるダンスを軸に、老人・子ども等社会的に周辺化されてきた弱い主体の再評価、(2)コンセプチュアル・アート関連での「エネルギー・アート」という領域横断的カテゴリーの吟味によって、現代アートと古代思想との関連を再考する道筋が拓けた。

研究成果の概要(英文)：Focusing on an alternative mode of art making since the 1960s, when the modernist medium-specificity lost its credibility and all the art genres became increasingly blurred, I mapped out some exemplary cases of art of "self-alteration", that is, art as tuning of the body/mind/space. An underlying philosophy, I argued, can be traced in various ancient (premodern), and often nonwestern, ideas on bio-cosmic energy and views of nature. Among the points discussed and searched in my studies, the followings are especially worth noting; (1) I pointed out how the socially marginalized subjects such as old people, children, etc., could suggest basic conditions of the dancing body, while dance may serve as a paradigmatic case for art of self-alteration. (2) the "energetic art," a category emerging with de-materialization of art objects, could be useful to bridge some ancient ideas and contemporary art practices.

研究分野：人文学

キーワード：美学 現代アート 舞踊研究 芸能研究 心身変容技法 エネルギー・アート

1. 研究開始当初の背景

(1)当研究の開始当初、芸術作品を自律的な単体として分析するのではなく、芸術の生産・受容の複合的文脈としての「場」、自然・文化両面からなる環境世界との関わりに注目する傾向が随所で顕著になりつつあった。他方、「場」の経験は本来、その主要な要素である身体を抽象的な観念や表象以上のもの—それ自体変化する個別具体的な空間に嵌め込まれ、そこで育まれている一人称身体として捉えることと不可避的に結びついているが、そのような身体的主体の最発見が美学の言説において十分になされているとは言い難い状況が存続していた。したがって、「生きられる/心身一体の」身体とその延長としての具体的な場・空間を問題の中心に据え、その身体的感性的に味わわれる自己（ミクロコスモス）と世界（マクロコスモス）に対する作用という観点から、現代アートやパフォーマンスの方法論にアプローチすることに意義が見出されると考えた。

(2)生活空間に一定の秩序をもたらす作業には、掃除・整頓等の再生産的労働による実質的対応とともに、儀式や祭礼といった象徴的儀礼的な対応があり、種々の芸術の起源をめぐる言説のなかにも空間の調節/浄化/差異化の意識との関連が認められる場合が多々ある。さらに、「気」「プネウマ」「プラーナ」等の微細な生体エネルギーの遍在を語る古代の身体論・宇宙論がそのような心身および空間の調整術（整体・武術・風水等々）の前提として一定程度共通して見出される。いずれも、芸術の成立過程に脱魔術化を想定する正統的な美学・芸術学の言説からは排除されてきたが、現代アートやダンスのなかにそのような古代的なものを引き継ぐネオ・プレモダニズムの系譜を読み取ることが可能であり、その批判的検証が求められていると考えた。

2. 研究の目的

(1)芸術/芸術家の介在によって「場が変わる」「空間の肌理が整う」といった感覚は、実践者の発言や批評言語のなかにはしばしば散見され、芸術経験の実質を成すと考えられるものの、そこで前提されている生命論・宇宙論・身体論と同じく、通常のアカデミックな言説には馴染みにくい。そこで、近年の芸術研究・美術批評のなかで提起されている「ネオ・プレモダニズム」の枠組みを用いて、具体例に

沿ってその特質(「自己表現」から「自己変革」へ、自律的作品から経験のプロセスへ、創造者から媒介者へという芸術および芸術家の自己表象の変化等)や問題点(西洋近代の外部に代替的ソースを求める「他者」の利用や近代スピリチュアリズムに潜在する閉鎖性等)を明らかにした上で、上述のエネルギー論的視点を含むアプローチを開かれた議論の形で提起する。

(2)ダンスやアートの複数領域を横断しつつ、古代・非西洋・代替的伝統・弱い主体といった「周辺」からの視座を方法概念として意識的に用い、芸術とその外部との従来との関係性を問い直すとともに、広義の(ないし現代版の)「ムーシケー」として読み替える可能性を追求する。

3. 研究の方法

(1)関連テーマの文献資料(現代アート、ポストモダンダンス、芸能史、身体技法・作法、武術、古代思想等々)の収集と整理。

(2)映像資料(現代アート、ダンス、ソーマティクス)の収集と分析。

(3)内外のミュージアム、展示スペース、アーカイヴ調査(ベニス・ビエンナーレ、ドクメンタ等の国際現代アート展の訪問調査を含む)。

(4)実地調査(場所設営型作品の事例調査とワークショップへの参加観察調査を含む)。

(5)関連分野・テーマを扱う内外の研究者に対する協力・情報提供依頼と研究ネットワークの形成(学会、研究会、シンポジウム、公開講演等への参加ないしそれらの企画開催)。

4. 研究成果

(1)1960年代以降のインター・アート状況のなかで生まれたポストモダンダンスのパイオニアであり、そのネオ・プレモダニズム的傾向の最重要なソースであるアナ・ハルプリン、および彼女の系譜を引き継ぎ、身体感受性の開発/生の技術に特化したソーマティクスの実践家(ジェイミー・マヒュー)を中心に、現地調査やワークショップへの参加、舞踊学大会への招聘、シンポジウム・特別講演・ワークショップの開催を実現し、その成果の一部を美学会例会での研究発表、美術館での招待

講演や論文の著述によって公けにした。その後ハルブリンのタマルパ研究所関連のワークショップに参加し、地球規模の浄化を目指す現在進行形の「星のダンス」プロジェクトの調査を行った。

(2) 脱近代を標榜する芸術実践を吟味する際に浮上してきた西洋近代の主体概念の限定性を明らかにするものとして、子ども／老人／病者といった「強い主体」のモデルから除外される傾向にあった周縁的・境界的な身体モード、その可能性に注目し、「老いと舞踊」をテーマとする国際シンポジウム(2012/6/28-6/30:ベルリン)に登壇し招聘講演を行った。同テーマで日本での国際シンポジウム(2014/5/23-5/24:東京)を企画開催し、内外の研究者・舞踊家・芸術家の参加を得て、問題の共有や深化を図る機会を得た。併せてポストモダンダンス研究の第一人者ラムゼイ・パートの講演会を開催し(2014/5/30:埼玉)舞踊の有する対抗文化的な働きについての知見を深めた。京都造形芸術大学での公開研究会(2015/1/24)において、老いのドラマトゥルギーの問題をミュージック・タナトロジー(死生学)や全体の気の思想を踏まえて発展させた。第19回国際美学会議(2013/7/26:クラコフ)の研究発表では、舞踊のカウンター生政治的側面とともに、古代の生存学的哲学／美学の伝統とも連なる「子どもの美学」を提唱した。

(3) カッセルの国際現代アート展(ドクメンタ)やそのアーカイブ、ヴェネツィアでのピエンナーレ、ポルドーの現代美術館、ロンドンのテート・モダン他を視察し、作品とその設営場所との関係を実地調査する機会を得た。とりわけヴェネツィアでは、ネオ・プレモダニズムの系譜にとって重要な参照ポイントとなったカール・ユングやルドルフ・シュタイナーの特設展示、シュタイナー室でのパフォーマンス、その他のサイトでのコンセプチュアル・アートの歴史的展覧会の再現等、多くの示唆を受けた。加えて、テート・モダンでのアグネス・マーティン(今回の研究でヴォルフガング・ライプと並んで中心的なネオ・プレモダンの美術家と見なしていた事例)の大規模回顧展も、複製画像では不可能な作品の放射を実見する上で重要であった。

(4) 「空間調整術」の問題にアプローチする研

究会を立ち上げ、第一回シンポジウムを開催し(2014/3/21:埼玉)諸方面からの参加を得て新たな研究ネットワークの構築に資するところ大であった。とくに1960年代以降のダンスやアートの拡大、旧ジャンルの解体状況を古代のムーシケー概念の射程と結びつけて領域横断的に考察する機会を提供することができた。それをもとに「musica mundana / 気の宇宙論・身体論」を埼玉大学リベラル・アーツ叢書6として刊行した(2015/3/25)。その延長として、20世紀初頭以来の美術のなかで「音」「響き」「エネルギー」をキー概念とし、空間芸術と時間芸術の区別を越える事例に注目し、「エネルギー・アート」(ダグラス・カーン)やサウンド・スケープ、ジョン・ケージの汎音楽主義、さらに広く環境芸術と古今の心身変容技法(鎌田東二)が提起する問題圏とのより直接的生産的な連関のなかで本研究のテーマを改めて錬成する方向が明らかになりつつある。同時に、エネルギーの増幅／調整装置の顕著な事例として舞踊という人類的営為を再考する方向が拓け、ムーシケー型アートのパラダイムとして捉える可能性とともに、「ダンス状態」(シモーヌ・フォルティ)が成立する要件として、種々の脱主体化の契機(自己という単位の無効化、性的アイデンティティを含むペルソナの動揺、憑依と模倣の往還、等々)を軸に考察していく今後の研究の方向性がより明瞭になった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

外山紀久子、ポストモダンダンスと現代美術：《トリオA》のエニグマをめぐる、『ニューヨーク—錯乱する都市の夢と現実』(論集・西洋近代の都市と芸術 No.7、田中正之編)、竹林舎、掲載決定

Kikuko Toyama, Infant's aesthetics for eudaimonia: a Neo-premodernist attempt, *Practicing aesthetics (19th International Congress of Aesthetics - proceedings)*, ed. Lilianna Bieszczađ, Krakow, 査読有, 2015, 93-103

<http://www.iaaesthetics.irg/publications/proceedings>

Kikuko Toyama, Old, weak, and invalid: dance in inaction, *JTLA (Journal of the*

Faculty of Letters, The university of Tokyo / Aesthetics), 査読有, 2015, 25-38

Kikuko Toyama, *ars vivendi* reclaimed: on the virtues of the body in "neo-pre-Modernist" art practices, 埼玉大学紀要(教養学部), 査読無, 49-2 巻, 2014, 91-104

外山紀久子, 受信型身体とは何か: 20世紀アートとスピリチュアリズム, 埼玉大学紀要(教養学部), 査読無, 49-2 巻, 2014, 75-89

外山紀久子, テルプシコラーはスニーカー履いてデモに行っていました、と誰かから聞いた、Japanese Society for Dance Research ニュースレター, 査読無, 2 巻, 2012, 2-3
<http://www.danceresearch.ac/newsletter/Newsletter2.pdf>

外山紀久子, 掃除ポイエーシス, 『日常性の環境美学』(西村清和編), 勁草書房, 2012, 361-391

外山紀久子, ポストモダンダンス, 『バレエとダンスの歴史』(鈴木晶編), 平凡社, 2012, 170-188

[学会発表](計4件)

外山紀久子, 「老いとダンスとアストロエステ: 旅立ちの日のための<音楽>」, 老いをめぐるダンスドラマトゥルギー, 2015年1月24日, 京都造形芸術大学(京都府、京都市)

Kikuko Toyama, Infants' aesthetics for *eudaimonia*: a neo-pre-modernist attempt, 19th International Congress of Aesthetics, 2013年7月26日, クラカウ(ポーランド)

Kikuko Toyama, Old, weak, and invalid: dance in inaction, Symposium: Aging Body in Dance, 2013年6月29日, ベルリン(ドイツ)

外山紀久子, 掃除・鎮魂・歌舞音曲: アナ・ハルプリンと「生老病死」のダンス, 美学会東部会例会, 2011年7月9日, 成城大学(東京都、世田谷区)

[図書](計1件)

外山紀久子編, 埼玉大学リベラル・アーツ叢書(*musica mundane*: 気の宇宙論・身体論) 6巻, アストロエステ(ティカ)覚書き: 「宇宙人としての生き方」に倣って, 2015, 7-30 ISBN978-4-9906251-2-22015

[その他]

展覧会関連企画での講演: 外山紀久子, マンハッタン、ダンス、掃除, 2013年9月15日, 栃木県立美術館(栃木県・宇都宮市)

国際シンポジウム広報用ホームページ
<http://agingbodyindance.tumblr.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

外山 紀久子 (TOYAMA, Kikuko)

埼玉大学・大学院人文社会科学研究所・教授

研究者番号: 80253128

(2) 研究協力者

中島 那奈子 (NAKAJIMA, Nanako)